

### 第3回「実践と研究の連環を考える」

松下達彦さん（桜美林大学）

日時・会場：6月22日（金）18:00-20:00 早稲田大学 22号館 2階 203

#### < 議事録 >

1. 趣旨
2. 質疑応答
3. 連絡

#### 1. 趣旨

- (1) テーマを見つけて、実践と研究の連環を作るにはどうしたらいいのか。それは、自分の実践に目を向ける事である。自分の実践のフィールドから研究テーマを見つけなければ実践と研究の乖離が怒りやすいからである。また professional isolation に陥らないために、現場の教師同士が目標を共有し、議論し合える文化を創ることが重要だ。
- (2) 理論は現場でどう役に立つのか立たないのか、現場での実践研究がなぜ必要なのか。現場その時々状況によって、教師として優先すべき事は変わる。現場を構成する要素は多様であるので、ある一つの理論だけで切り取っても教室の全体像がわからないし、価値判断の根拠にもなりにくいので、ある活動は複数の側面から検討されるべきである。このような複合的判断を研究すること、バラバラに存在する理論の統合を考える事が必要である。現場での研究には、既存の理論を現場の文脈にあわせてどう統合するかという側面がある。とくに教育ような臨床的分野の研究は、現場での判断のもとになる知識（自然科学的知見）と価値観（社会的価値、哲学）を統合することである。教師はみな自覚の有無に関わらず理論をもっているので、その内面に持つ理論に自覚的になる事、その上で理論の前提となっている価値が何なのかを考えることが必要がある。具体的には、現場での疑問から出発して判断に至る過程、つまり自分なりの原則を、データに基づき、理論や自己、他者の経験とつき合わせ、ある方向性に向かって少しずつ動いて行く事が現場の研究そのものではないだろうか。

#### 2. 質疑応答

発表者：いろいろな理論が持つ価値とは？ その様々な理論がぶつかるような例はあるか？

参加者1：一緒にやろうというテーマを持って集まった場合、譲り合えないような議論になってしまった場合はどうすればいいのか。解決法として目標を共有するという方法も考えられるが、どうすれば可能になるのか。また口コミで広がると共に考えて行く上でいいことがあるのか？

発表者：教師ビリーフはそう簡単には変わらない。体験に根ざしている。私が中国語を学習したとき体験はつよいビリーフになっている。しかしそのビリーフが凝り固まっては行けないという事に自覚的であるべき。それを揺るがせるのは現場を共有する教師同士の話し合い。同僚の良い実践をみたりして自分の引き出しがひろがる。次第に根っこにある深い部分の対立まで議論があがってくる。そうなるとうまい立ち、ビリーフのもとになっているもの話す事が必要。口コミについて。職場が違う場合は、自分たちが問題意識として持っているものが共有されやすい。メンバーが活性化。同じ職場の場合は、ささやきつづける。あきらめずに発信する。

参加者1：作文のフィードバックの例。たくさんの理論が先生のなかに巻き起こったのだと思うが、それを実際のどう初級場で学習者にフィードバックしたのか。

発表者：その二つの言葉だけは日本語で言える様にしようと思った。英語でもいいから自分が言いたい事を書いてくる様に言った。結局それは書いてこなかったが、辞書で単語を調べて出して来た。

参加者1：初めに課されたテーマは書かず、フィードバックを受けた後も。。。

発表者：出されたテーマについては結局書いていない。しかし作文の授業はマンツーマンではなく、書いたらまた発表という型を取りシェアしている。その場でむりやり課題へ戻そうとは思わなかった。どの作文でも項目で使われたことを自然な形で自分自身のフィードバックに使う様にしていた。教科書にただ書いてあるのと、インターアクションのなかで教師が実際につかうのとでは学習者にとって意味がちがう。「～友達に教えてもらったらどうですか？」など。

参加者2：クリティカルな状況の学習者について。地域教育の例で、外国人の主婦が日々の生活の問題で言葉が通じない為に困っているということなど、広い意味で言語の使用に関するクリティカルな状況というのは分かるが、幅広く言うと言葉と関係ないところでクリティカルな状況というものもある。言葉の使用に関するクリティカルな状況というのに限らないと、個人的な状況をどこまでどの範囲で教師として扱うの

か難しいのではないか。誰がどこにクリティカルな状況を見いだすかは人の価値観による。

発表者：私は言葉の使用状況には限らない。自分が言語教師をやっていくのは言葉を教える事が最後の目標ではない。自分のもっている社会的価値を自分ができる範囲内で最大限に説明したい。まず学習者の心身の健康を最優先する。それが保てている状況ならば、自分ができることは、自分が目指す社会の最大限に実現する事になる。その時言葉の問題は大きなものの一部にすぎない。そこから先は学習者の状況により違ってくるが、上級者で通じるのであれば、内容にうんと偏った話をする事もある。初級に近づくと、学習者がどのぐらいが学習つづけるかなどによって、その人にとって日本語を学ぶ事にどのような意味があるかを考える。短期で来ていて初級で終わってしまうなら、挨拶ができてなかのいい友達ができ、異文化コミュニケーションのセンスが身に付けばいいというとき、細かい文法の説明をしてもあまり意味が無い。長期的で上級まで勉強し日本語を使って何かをしよう、という学生ならば、きちっとした日本語を教えなければ。中級の学生で、自分に漢字は必要ないという。金融機関で働きたいから、必要なのは居酒屋トークだということを知覚している。そういう議論を学生ともする。

参加者3：一つの理論だけで凝り固まって実践を見ようとする、他の理論や見方が排除されるというのは同感できる。松下さんのお話で、すべてがその場その場での状況で決まるという事があったが、それは断片的な作業にしか私には思えない。そうではなく、長期的に見て学習者にその活動がどのような意味があったかということを知りたい。ひとつずつの学習者のニーズによって活動を作るということと、その活動が将来に響くような全体の過程として、その活動に付与する教育観や価値観が存在するのか？学習環境やニーズによってその都度活動を直してしまうと、実践全体の成果というより最終的な目標の支障になってしまうのでは？

発表者：答えはイエスです。自分のなかの価値には優先順位がある。サーフィンが好きでサーフィンの日本語を学びたい、というような学生がいるが、それは社会的な意味があるのか。日本語学習は義務教育でないが、留学生として勉強できる恵まれた人間に与えられた役割を考えなければならない、個人的なニーズをだけをいつも優先すればいいというわけではない。国の為につくせというのは違うが、社会的価値というものは私のなかで大きな意味をもっている。しかし心身の健康を保つという点においては個人のニーズが最優先。留学生にとっては結構大きな問題。ホームステイの家族との問題など。日本語だけ教ればいいのかは思っていない。上級クラスで唯一残っている必修クラスでは日本語の習得に重きを置かない。学生レディネスやニーズもばらばら。学生それぞれに言語環境、履修授業、キャンパスであったことなどを書いてもらう。帰国してからも就職活動等に使える様に。言語教育の味付けを

しつつも、自分と日本語の関係を考えさせ、発信できる様にするという目標。6000語レベルまでは与えられたものを学習して行けば着実にのびるが、その後は1%あげるために、何千という語を勉強しなければいけない。これが中級の壁。だからその上級以上は自分は何の為にどこで日本語を使う必要があるのかを考えて行く必要がある。この言語学的説明をして納得する学生もいる。

参加者4：なんの価値観を持たない教室はありえない。価値観をどういう意味で使われているのか。社会的価値の価値と教室の価値とどういう関係があるのか。

発表者：パウロ・フレイレ研究の野本さんを参考文献に。学習者をどういう存在としてみるかという話。学習者を仮にマジョリティの社会に従わなければならない存在とする、そのようなことを意識するのとししないのとで、結果的に実践に違う意味がでてくる。日本の社会で労働している人々に必要な日本語とは何か。それを自覚しようがしまいが、教室自体が政治的意味をもっている。

参加者4：女子大生という言葉にある、文化的な背景、意味合いがついてくるのと同じことか？

発表者：そうではなく、ある価値を意識するのとししないのとで実践の仕方が違ってくる。またそれを意識していない教室実践は、ある価値をもった実践と比較した場合、違った意味を持つてくる。

参加者4：先ほどの続きで、人間としての学習者への責任、つまり学習者が楽しくやっているかどうかだけでは無いと思うが、最終的には松下先生の教師としての使命、どのように教育者としての立場を考えているのか？

発表者：自分が生まれて来たのは偶然。世の中に生まれながらにして恵まれた人間とそうでない人がいて、それを見て見ぬ振りをするわけにはいかない。それを日本語教育の実践でどう実現できるかはその場の状況よる。みんなに同じようなことが伝わる訳ではない。初級者に難しい事をいっても伝わらない。しかしどこかで何か伝われば良い。日本語を学習者がみにつけることで、ビジネスや国家交流、国際結婚していくなかで、ひいては国家間、異文化観の摩擦を解消して行くようなことになれば言いと思う。また、それが恵まれた状況であるということどこかで伝えておきたい。しかしそれは何のコンテキストが無いところで言っても伝わらないので、それを実際どのように教室に組み込んで行くかは具体的な方法論になる。

参加者5：理論という言葉について。いろいろに理論が使われている。島では内にある理論、外にある理論という話がでた。言語習得の理論と自覚の有無にかかわらず出来てしまった理論というのは同じ意味で使われているのか？

発表者：ちがいますね。原則が理論というレベルまで行くかどうかは言葉の問題かもしれないが、実際にあるものを理論化する研究の方法論はいろいろ出ているが、それは部分的には外にある理論。他のひとが先行研究等でまとめあげたものにつながっていることは結構多い。必ず一対一でつながっているわけではない。

参加者5：そのとき教師が自覚の有無にかかわらず持っている理論というのは、理念とか価値観という意味か？

発表者：理論と呼ぶかどうかは別にして、自然科学的知見というのは人間が意識していないもの。言語習得等、一般的にこうなる、というもの。もちろん例外はあるが。その辺りが社会科学は違うところ。社会科学における理論は価値を含んだ理念。それは突き詰めて行くとそれ以上議論できない所までくる可能性がある。ただ、どのように制約や促進要因があるのかは、価値を離れた理論が成立するのかは分からない。その理論を現場とどう結びつけるかとなると、価値の話を考えあわせなければならぬ。なぜならその理論が価値を含んでいるから。

参加者：理論の対立を統合させる、統合が必要という事をもう少し詳しく。

発表者：統合という表現が良くないのかもしれない。統合というと気づいた理論だけしか含まれないし、理論優先する応用科学的な考えが入ってしまうかもしれない。思いついた理論同士が対立した場合どうすればいいかに限って話をすると、判断の過程をたどって考えていくと、フローチャートが書ける。まず優先する価値はこれで、つぎに学生の心身状態がきて、etc.その時いくつかの判断材料がある。一つの理論や価値だけで判断するのではなく、複数の価値に優先順位をつけていき、それを最終的な判断に結びつけて行くかということ。自分の中にある価値に気づき、その価値の根拠を考え、そして順番をつける。判断の根拠の中には自然科学的知見も含まれる（文法、文法習得、音声、社会的に持っている価値、言語政策、カリキュラム）。そこには価値があって、それに順番をつけるということが理論を統合するという事。

細川：実践研究というテーマにひきつけて考えると、多くの人は自分はどのような実践をしているかを考え、今後どのような実践をしようかと悩んでいるひとが多くいると思う。教科書をどう教えるかを考えることには限界があり、自分はどのような実践を設計していくかを考えようとし始めていることが、実践研究という現場のうねりとつ

ながっている。そのとき、自分のなかに色々ある価値はそんなにすぐ変わるものではないのでは？ 松下さんの言った事はよく言えば流動的で柔軟。わるく言えばその場の状況に自分を当てはめているだけ。松下さんがどのような実践をしたいのか、その実例を見せてもらった方が話が早いかも。

発表者 : 自分の学校をつくれたら、ということを考えるのもいい。流動的にみえるのは、自分自身がプログラム全体をつくる立場にいるから。もし自分がすべて設計できる場があれば、レベルによって異なるし、それは最終的に相手との関係によるので、相手が持っているものに対して、自分の持っているものが一番効果的に伝わるかを考えるので、一概には言えない。だからこそ逆に現場を共有する教師で話し合う事、そのクラスがプログラムや学習者にとってどのような位置づけになるのかを考えるべき。教師はひとりで全部できる訳ではない。職場を同じくする教師と自分の持っている価値が響き合うと大きな力をもつ。最後に、学習者が世界全体の中でもっている社会的ステータスや地位は自分が教室を設計する時に大きな判断材料になっている。

書記：古川奈美